西洋音樂の發達につきて

（九月の臨時會に於る講演の大要）

田邊尙雄

一、上世音樂（ギリシャ音樂とローマ音樂）

歐羅巴の古代の音樂として考へられる最初のものがギリシャ音樂である。これは西紀前一千年頃から初世紀迄ので、極く自由に感情のまゝを表はした音樂である。この時代は宗教上神と人との境が極めて曖昧で、人間が少し偉くなれば神に成れる樣な事を考へてゐた時代であつた。從つて神に對するのも人に對すると同じ事で、神と人との間が至て親密であつて、神を笑はせて慰める音樂だつたのである。そのため歌詞をはつきり歌ふ事に氣をつけて、形式にはあまり注意をしなかつたらしい。ギリシャ音樂はギリシャの運命と共に初世紀の頃亡びたので、その後ローマの勢力の續いた間殆んど全く跡を絕つてゐたが、十六世紀の頃希臘羅甸の古學が復興されたため、音樂の方でも希臘時代のを大層探し索めた。けれどもなかなかわからなかつたが、十九世紀の半頃に、デルヒの塚からアポロの讃美歌が掘り出されので、非常な便を得る事が出來、熱心にギリシャ樂譜を研究した結果、それを讀む事が出來たのである。アポロの讃美歌と云ふのは大凡紀前六世紀頃のものらしく、これが今日に殘つてゐる希臘音樂中、唯一のものである。

これに續いてローマ音樂が起る。初世紀の頃から凡そ十世紀間の音樂である。ローマの思想はギリシャの

それとは全く違つてゐて、神を神聖なものとして仰いでゐるのである。從つて神を笑はせて慰めるのでなく泣いて訴へる音樂である。そのため歌詞をはつきりさせては壯嚴の感を殺ぐといふので、極めて不明瞭に歌ひ、その代りに形式の方に非常に注意した。即ちギリシャの內容音樂に反して、之は形式音樂である。勿論之迄のは全く宗教音樂でまだ作曲法などは無くたゞ單音を多人數が聲を揃へて歌ふのであつた。伴奏といふものも勿論なかつた。ローマ音樂の初めの頃はまだローマの國の統一が充分でない時だつたため、特別よいものとては無かつた。四世紀の頃にミラノの司教アンブロジウスといふ人が出て歌ひ方を定め、その理論はいまも殘つてゐる。七世紀の初め大法王グレゴリー一世が祈禱式の唱歌を制定した。これは今もローマ法王の宮殿には少し殘つてゐるといふ事である。ローマ音樂はこの二人の力によつて進んだものである。

二、中世音樂（宗教音樂と俗樂）

上世音樂の後文藝復興に到る迄の音樂である。その初めのは殆んどわかないが、十二世紀になつてから藝術的音樂と俗樂とが分離した事は疑はれない。この中世での藝術的音樂は宗教音樂である。十二世紀に初めて作曲法があらはれた。先づ活動したのはネザランド地方の人々、即ちチユートン人である。最初の作曲法はカノンである。これは輪唱であつてデイフエーによつて創つたといふ。デイフエーより以前已に十二世紀にフランスの某僧が發明してをいたのを、十三世紀の初めにデイフエーがベルジウムへ持つて歸り、それから此の法が行はれる事になつた。カノンは實に作曲法の先驅になつてゐるのである。形式の原則はリズム（拍子）、メロデイ（旋律）、ハーモニー（和聲）の三である。この中最も簡單なものはリズムで、一番理性的な進んだものはハーモニーである。

俗樂は中世の武士によつて初まる。武士は高尚な音樂よりも簡單なものを喜ぶ。たゞ上世の音樂より進んでゐると思はれることは、伴奏を附ける樣になつた事である。作曲法などは俗樂のはじめは、無論無い。十字軍時代の武士は作曲作歌を自分で爲し、トルバドールとよばれる事を無上の名譽とした。十字軍の後百年も經ては、武士も肝腎の役目の方が割合にひまになり、從つて音樂の上にも力をつくしたので、俗樂が著るしく進歩した。有名な人はアダム●ド●ラ●アールといふ人である。

藝術的音樂は中世期に非常に進歩した。前に云つた通り宗教音樂だつたのである。中世に於いて勝ちをしめたのはチユートンの音樂で、ラテン人はこれを傍觀してゐる有樣であつた。ヨーロッパの音樂は、實にチユートンとラテンの競爭の結果進んで行くのであつて、この時代は全くチユートンの勝利に歸してゐたのであつた。チユートンといつてもまだオランダ人が眞先で、ドイツ人は頭を上げて居なかつた。チユートン人が次第にローマへ出かける樣になつてから、ラテン音樂とチユートン音樂とが折衷し、十六世紀にかゝる頃には、折衷の巧みに達し、その大家としてオルランド●ラッソオ（一五二三―一五九四）がある。この人は中世に一等地を拔いた大家で、プリンス●オブ●ミウジックと稱へられた人である。中世音樂は此人に到り殆んど完全の域に達した。

三、近世音樂（劇音樂と純音樂）

中世は宗教に抑へられ神の夢を見て居た時代で、宗教音樂が行はれたが、文藝復興によつて大いに目が覺め、人間としての元氣を生み出したのが近世音樂になつてあらはれる。此の時代に新しく興つたもは劇音樂と純音樂である。

1、劇音樂

劇に音樂を用ゐる事は遠く古代からあつた事で、ギリシヤ時代は盛んにやつてゐたらしい。その頃の劇は今判然しないが、表情的舞踊に唱歌の伴奏を附けたものである事は疑ひない。ギリシヤの晩年からローマの初期にかけて、之が宗教的に發達して居たのであらうが、一五〇〇年ばかりの間殆んど葬られて居た樣な有樣であつた。文藝復興に當り、學者の間にギリシヤ劇の復興を熱望するの士が輩出した。彼等はフロレンスのジオヴニ●バルデイ氏の家に會して古劇の研究をはじめた。即ち歌劇は伊太利に於いて是等の學者の研究の結果發達したものであつて、自然の發達では無かつたのである。當時ローマ市ではまだ中世音樂が盛んでコーラスのみを行つてゐたが、ヴエニスは商業地だけに早く開け、此頃から管絃樂が此の地で始まつた。ナポリは南國で歌謠が著るしく發達し、セレネード（小夜樂）の如き非常にたくみなものが出來た。斯樣に近世音樂の始めは伊太利が最も活潑で、フランスは直樣之に眞似て熱心に劇を研究したけれども、獨逸人は自然の發達を待つて敢へて急がなかつたから、伊太利よりも一五〇年位後れて發達したのである。十七世紀の始めに發表された歌劇を手始めに、ヴエニスは金を惜まず大きな歌劇の研究所を建て、ンテヴモエルデが其處居て研究したので、ヴエニスを中心として益々盛んになつた。モンテヴエルデの歌劇として最初に成功したものはオルフエオである。氏はこの歌劇において、希臘の古にかへり歌詞をはつきりわからせる事に氣を付けた。次に發表した歌劇に於ては、管絃樂にはじめてヴアイオリンを入れ、大いに成功した。しかし氏の歌劇はギリシヤ式の幼稚な點が見えて思はしく無かつたが、スカラッチに至つて非常によくなつた。劇音樂の第一期に於いての大家はこの人である。フランスではルリーとラモンの二氏が顯はれてゐる。伊太利式の歌劇

の欠點は、面白く歌はんとする爲めに動作が等閑になる事であり、フランス式の欠點は動作に氣をつける結果、音樂が粗略になる事であつた。之を巧みに改良したのが獨逸のグルックである。時はすでに十八世紀の末であるが、之迄ドイツの歌劇は興らなかつたのである。グルックは(一七一四年オーストリアに生る)伊佛兩者の欠點を改良し頗るチュートン式を發揮して改革を稱へ、第一着手として「オルフエオとユーリデイチエ」をヴヰンナで發表した。けれども氏の歌劇はまだ充分とは云はれなかつた。歌劇の第二期は實に此の後であつて、第二期に歌劇は非常の發達をなしたのである。この時獨逸が始めて伊佛と並ぶに至る。第二期の歌劇に於て伊太利を代表するものには最初にロッシニと、ドニセッチとがある。獨逸を代表するものとしてはモツアルトが出て居るけれども、之は純獨逸式ではなくて伊太利式に傾いてゐた。十九世紀のはじめウエーベルに至つて、初めて眞の獨逸式の歌劇が出來て居る。この人のは實に伊太利式の巧みな節廻しと、佛蘭西式の面白い拍子と、獨逸式の非常な深みとの三つが、實際に好く一致した歌劇である。この世紀の半ごろにフランスにマイエルベールが出て、歌劇はリズム、メロデイ、ハーモニーの何れにも偏すべき物でなく、好く調和させて然るべしとなし、その結果發達したのがグランドオペラである。獨逸のワグネルが此のグランドオペラを見て非常に感じ、大いに研究した結果非常な大事業を成したのである。當時の時勢として、人心が伊太利式や佛蘭西式の輕快な音樂よりも、もつと非常に力强い音樂を要求してゐた時であつたので、筋を大ていは歴史上の大事件に取つた大々的のこの歌劇が、歡迎された事はいふ迄も無い事である。

ワグネルの第一期はウエーベルやマイエルベールを眞似た時代で、此時のには大したものはない。第二期は過渡の時代で其の期の作としては第一に「飛び行くオランダ人」がある。之はワグネルが英國に渡らんとし

て海上暴風に遭ひ、命からゞ〳〵引きかへす際に、オランダ人が巧みに風波の中に小舟を繰るのを見、自然の威力の大きさをしみ〴〵と感じて作つたものである。次に「タンホイゼル」がある。これはワグネルの天才がまだ充分發揮されてゐない作品である。次の「ローエングリン」になればワグネルの價値が遺憾なく發揮されて居る。從來の歌劇は舞臺と音樂とが主從の關係であつたのを、ワグネルは、歌劇の役目は耳目一致の藝術たる事にあるので、歌樂と舞臺とを同等にぴつたり一致させなければならぬとして、其の實現に努めたのであつた。ワグネルの第三期は專ら理想實現の時代で、周圍の氣分を劇にふさはしくさせたい爲めに、由所のあるバイロイトといふ閑村に劇場を建て、此處でしきりに研究した。この期に於いて氏の絶大の作とする所は「ニーベルンゲンの指輪」である。之はノルウエーの昔話に着色したもので、半神半人の爭ひの有樣など目に見える樣にうつし出して居る。之は實にワグネルの理想通りのものであつて、もう此後はワグネルの頭には殘るところ僅になつた。

このやり方が歐全體に影響し、歌劇第三期はこゝに初まつたのである。ドイツ式の音樂は非常に威力がある代りに、音は極めてきたない。ことにワグネルのは甚だしい。之を眞似てやり始めたのは伊太利のヴエルデイである。從來旋律の美を特色とした伊太利式の中に、更にワグネルの方法を入れたため、非常に立派な歌劇が出來、從來舞臺と音樂のくつゝきが思はしくなかつたのに、此人によつて非常によく調和させられたのである。「イル、トルバドール」は最もよくこの人の天才を露はしてゐる。

ドイツの歌劇はワグネルを以つて止まり、ヴエルデイの歌劇が最後に勝利を占め、今後はこの人に及ぶ者は到底あり得ない程になつた。

2、純音樂

これがヨーロッパの音樂の主要點で、專門の研究によらなければわからない。とにかく近世音樂はラテンとチュートンとの非常な大戰爭の舞臺で、音樂の中心が如何なる方面に移つて行つたかは頗る見物である。

十七世紀は文藝復興の餘波がまだ引かないで、只宗教音樂の衰へに代り新らしい音樂の勃興する準備の時代だつたのである。十八世紀の頃、純音樂の最初の目覺めに於いて活動した人には、獨逸のバッハ（一六八五―一七五〇）とヘンデル（一六八五―一七五九）とがある。この頃は未だ中世の考への殘つてゐた時代で、音の組合せ方を誤つてゐるといふ事に氣付かなかつた。ピアノやオルガンの如き平均率の發明があつたのはこの十八世紀の半以後の事で、これ迄には未だ無かつた事である。ラテン人が劇の研究に夢中であつた時にチュートン人は純音樂の上に非常な發展をなしつゝあつたのである。次に現はれたのがハイドン、モツアルト、ベートーベンの三氏である。近世式復音樂はバッハの後急に衰へて、近世式單音樂が是に代り、ハイドンモツアルト、ベートーベンの最隆時期となつて來た。こゝにソナタ形式（奏鳴樂）が起つたので、これの大成に與つて力あるものはハイドンである。ハイドン（一七三二―一八〇九）は又シンフォニー（合奏曲）の形成をも完成した。殊に有名なのはイギリスシンフォニーで、實に見事に形式が完備してゐる。ソナタ形式は至つて哲學的、論理的なものであるから、全くチュートン人にのみしか出來ない仕事である。このチュートン人の近世的單音樂をクラシック音樂といひ、之に對して後に出るラテン人の音樂をロマンチック音樂といふ。

モツアルト（一七五六―一七九一）はオーストリアに生れ、幼少の頃から驚くべき天才を發揮し、四才の頃すでに驚くべきコンセルト（司伴樂）を作曲し、七八才の頃に達しては如何なる曲も作り得ない物は無いといふ有樣であつた。歌劇も十二三才の頃から續々あらはれて初めてゐる。ハイドンに就いて學んだので、作曲法は少しも誤つて居ないが、非常に子供らしいといふ點が此人の作品の欠點である。しかしその爲め却つて形式は非常に自由で、出る音が誠に新鮮な氣持ちがする。實に氏の樂風は眞に天才の發露で、特別研究したものでもなければ改革したものでもない。ハイドンのよりも表現の方法に於いては一歩進んで居ると云はれる。特に立派なのはジユピターシンフォニー（ハ長調シンフォニー）である。

二人の樂風を總合して表はしたのが彼のベートーフエン（一七七〇―一八二七）早く母を失ひ、家庭の快樂を受ける事なく、不遇な中に人と爲つた。その性質はその影響を受けてゐる事が非常に多く雄健なチュートン人種的な色彩を帶びてゐて、極めて正直である。その思想は深遠で、創作的であり、その頭は理性的で論理的であつた。ウキンナに行きハイドンに師事する事によつて、彼の人の情に對しての强い憧れが幾分達せられ、北獨逸の非常な理性的な性質と、南方の性質とを調和させる事が出來た。モツアルトが時折ハイドンの許に來る事が、ヴエートーフエンには好い刺戟であつた。氏がハイドンやモツアルトの影響を被つた時代を第一期と見れば、第二期は師たるハイドンも、モツアルトも死して、ベートーフエンの一人舞臺となつた時代である。後世に殘つてゐる作品は皆第二期以後の物である。第二期の作品からは氏の個性が殊によく表はれて來た。この期の終方には次第に耳が聞えなくなり、終には全く聾になつてしまつた。これからが氏の第三期で、其の人格の出世間的な宏壯な所がよく表はれてゐるのは、此期に於ける作品を第一とする。第九シンフォニーが實にそれであつて、人間最高の藝術と稱すべく、この人を措いて到底能く作るものはないのである。是れ無くともベートーフエンは矢張り第一におくべき人である。從來の音樂大家の作の如く人を慰

め又は壓する爲めの音樂では無くて、全く只全人格のあらはれなのである。氏の樂曲は非常にむづかしくて之を味ふには氏の人格を受け入れる素養の有る人でなければならぬ。そのため現今は廣くもてはやされる譯には行かない。チユートン主義の音樂は氏に於いて其の極點に達し、最早是れ以上に出づる者は勿論無く、是に及ぶ者も無い。これから十九世紀の音樂が始まるのである。

十九世紀の前半に活動したのは矢張りチユートン人で、後になると次第にラテン人が活動して來る。先づ擧ぐべきはシユーベルト、メンデルスゾーン、シユーマンの三氏である。抑々多くの音を理論的に組合せるといふ事（ハーモニー）がチユートン人の特色とする所であつたのに、シユーベルトの頃は其の特色を固執する事が出來なくなつてしまつた。シユーベルト（一七九一―一八二八）はウキンナに生る。聲樂・器樂・管絃樂歌劇に渉つて澤山の作曲がある。有名な「未完成シンフオニー」（ロ短調シンフオニー）には最もよく、その旋律の歌謠的な美しさが表はれてゐる。形式はクラシックであるけれども、その多音をきれいに明瞭に現はさんと努めた所にシユーベルトの特長が顯はれて居るので、これが從來のチユートン主義の音樂の衰へる事を豫言してゐるものである。

メンデルスゾーン（一八〇九―一八四七）はドイツのハンブルグに生る。この人に至つては益々きれいな面白い作品が出た。家が富裕であつたため、自由に師を求める事が出來た。しかし餘り順境すぎて、非常に立派なものとては出來なかつた。氏の作風はラテンの音樂に近づいては來たが、未だ形式の中に少しはチユートンらしさが見られた。次のシユーマンになれば全くラテン主義になつてしまつてゐる。

シユーマン（一八一〇―一八五六）はドイツに生れた。そのはじめピアノの作曲をしてゐたが、中年に有名

なピアニストの女と婚してから後は、聲樂の曲を多くこしらへた。非常に熱心にやつたため狂氣になり、ライインの河に投身し、救ひ上げられたけれども、間もなく死んだ。シユーマンは作曲の法など悉しく知らなかつたので、チユートンの形式的な點を全く見せてゐない、氏の作曲中有名なのにはヴアイオリンの曲に「夢」がある。シユーマンのは全くクラシツクの影がない。巧みに感情を表はして居る。

斯樣に十八世紀の頃はラテン人が劇に夢中で、チユートン人の純音樂發達については少しも顯みなかつたけれども十九世紀の末は時勢がこの樣になつて來たので、フランス人の中からもグーノーの樣に立派な大家があらはれてゐる。グーノーのセレネードは非常に廣く歌はれてゐる。

四、現代音樂（ロシア音樂）

現代音樂はロシア音樂の勃興である。ロシアに猶太教が入つた事によつて、ユダヤの音樂がロシアに傳はつたのであつた。これはアラビア音樂であつて非常に進んだ程度の音樂である。樂器を一切用ゐない。全く聲のみでやる。ロシアでは農民さへ四重音の歌を歌ふ程なのであるからその程度は非常に高いのである。ロシア音樂は、今發達の道程にあるのであるから、遠からずして立派なものがあらはれるだらうと期待される。

現代の人心はチユートンの音樂の樣なむづかしいものには既に厭き、ラテンの音樂にも興味を有たなくなり、それといつてロシア音樂の發達を待つ間も待遠しいといふので、何か新しいものをと探し初めた。ボヘミヤのヅボルシヤク氏がアメリカインデヤンの中に入つて研究した。そして半音の少い極めて簡單なものをとつて、進歩した形の音樂にこしらへて見た。是は「新世界のシンフオニー」であるが極めて奇妙なつかまへ所のないものである。

現代の人は物質文明の結果頭が進んで來て、單に音樂だけ味ふに止まらず、種々のものを同時に味はんと要求するのである。光と音とそれに匂とを合致させ、同時に味はうといふ理想で試み見ても、まだそれは實現出來ない。軍備擴張のために神經過敏の極に達してゐる現代に於いては、音樂は實に落ちつきのない狀態にあるのである。この戰爭によつて、この鼻もちのならぬ音樂の打ち倒された後に、初めて二十世紀の進んだ音樂は生れ出るのであらう。そしてそれはすべての感覺を結びつけた所の音樂であつてロシアからあらはれるに違ひないと思ふ。（文責在幹事）

專一

□襷の名前

二三日前に「襷には名前を附けておくやうに」と伺つてあつた時のことであつた。体操の時間に平均臺を渡つて行く皆の後を見てゐるうち、ふと襷のことを思ひ出した、未だ名前を書いてない人、布地へぢかに墨で眞黑に書いた人インクでなすり附けてある人、などのあゝ中に、ふと友のはと見ると、如何にも氣持よく、しんを入れてしつかりとくけた襷のはし、に似寄つた色のより糸で一針一針細かに學年までも縫ひ込めて、丁寧に出來てゐる。「物事はいゝ加減にしておけば、又きつとやり直ししたりしなければなりません。結局始めから徹底的にしておくに限ると存します。」と云つてゐた友の言葉を思ひ出して、大きく一人うなづいた。

大正六年度に於る國語教授界の諸研究